

第1章 水辺のまちの立地特性 —視察都市の比較を通じて—

I はじめに

「まちづくり」に関する研究は、主として都市計画、都市工学、地理学、都市・地域経済学などの各分野で行われている。最近では、ミクロ的には駅前商店街を活性化するためにはどのような「まちづくり」が必要であるかということが焦点になっている。一方マクロ的には地方都市の衰退をどのように受け止めるかということが問題となっている。相対的に国土が狭い日本といえども時間と空間を考えると、歴史、風土、これらにもとづく産業、さらにはそれら産業を支えている町村を含む都市の数は多々ある。そこでは、日本の地理的特性ともいえる河川、橋およびお堀を観光資源に生かしたまちづくりは比較的多く見られる。かつて視察したことがある岩国市の錦帯橋などはその一例である¹。

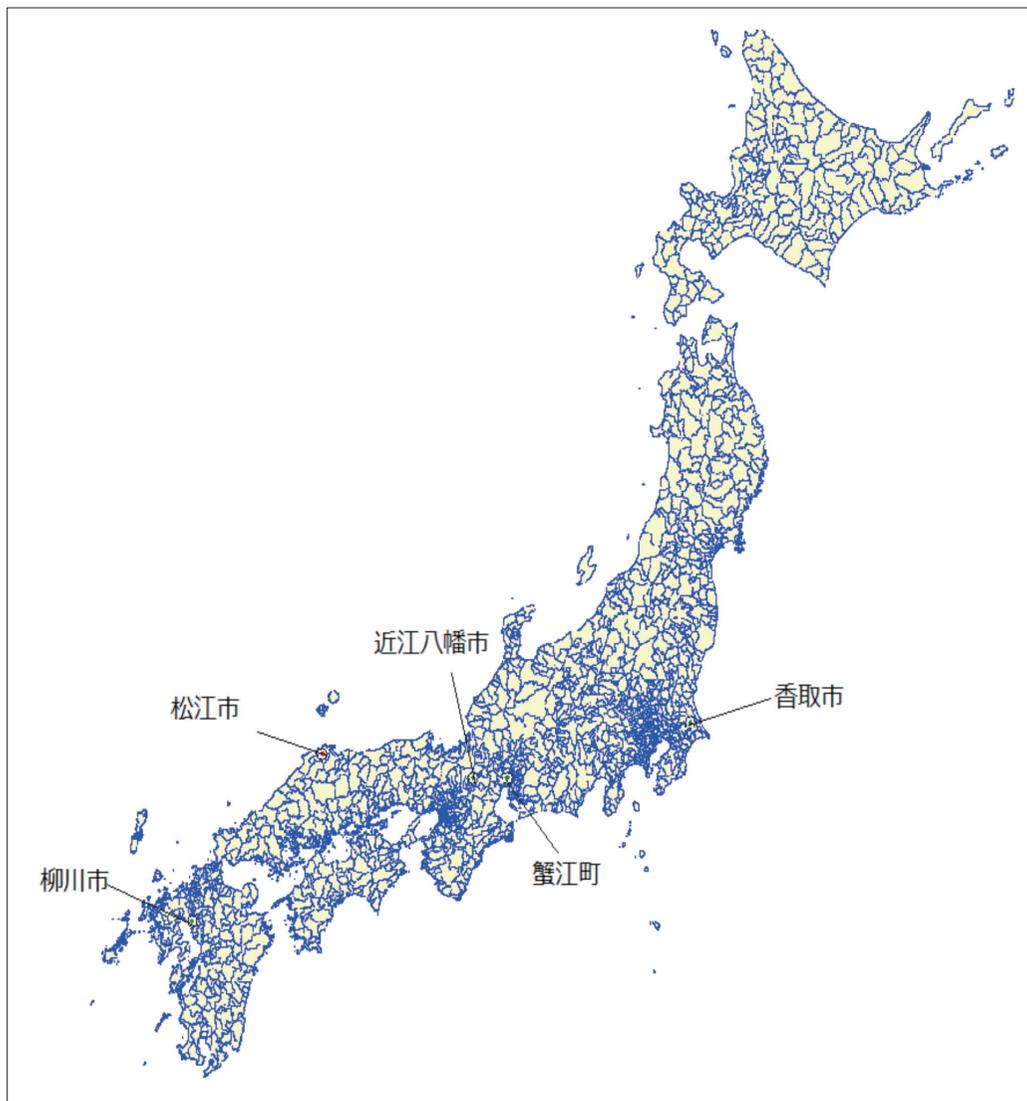
水辺を生かした「まち」として名高い所は数多くあるが、ここでの研究対象は、経営総合科学研究所のプロジェクトにおいて、2012年の視察先である柳川市および香取市を踏まえ²、かつて盛んであった水郷のまちとして、共通する4つの都市（柳川市、香取市、近江八幡市、松江市）³および愛知大学公開講座で研究を深めた蟹江町、さらにこれら5つの都市（図1）が属する都市圏・エリアが含まれる。まず人口、年齢構成、歳出などのデータから都市間比較を行い、特化係数手法を応用することによって導かれる特化産業の共通性について考察する。ついで主成分分析を用いて地域特性に関する比較を行い、最後に2013年の夏休み中に視察した近江八幡市および松江市について地理的考察を試みる。

1 これについては、神頭・角本・麻生（2009）を参照せよ。

2 柳川市、香取市の研究成果は、蟹江町も追加され、神頭・駒木・吉本・麻生・角本・張・長橋・野呂（2013）において発表されている。

3 これら4つの都市については、最初に研究を行った蟹江町が、かつて水郷の町として知られたことから、他の都市と比較する上で、水郷をインターネットで調べた結果、よくネット上ででくる九州地域、中国地域、中部地域、関東地域の代表される都市とみなして、視察の対象とした次第である。また、水郷のあり方とともに、お堀やシネマの舞台にも利用されていることも多く、ここでは水郷をさらに拡大した意味において本叢書のテーマを水辺のまちづくりとした。

図1 視察先都市の位置



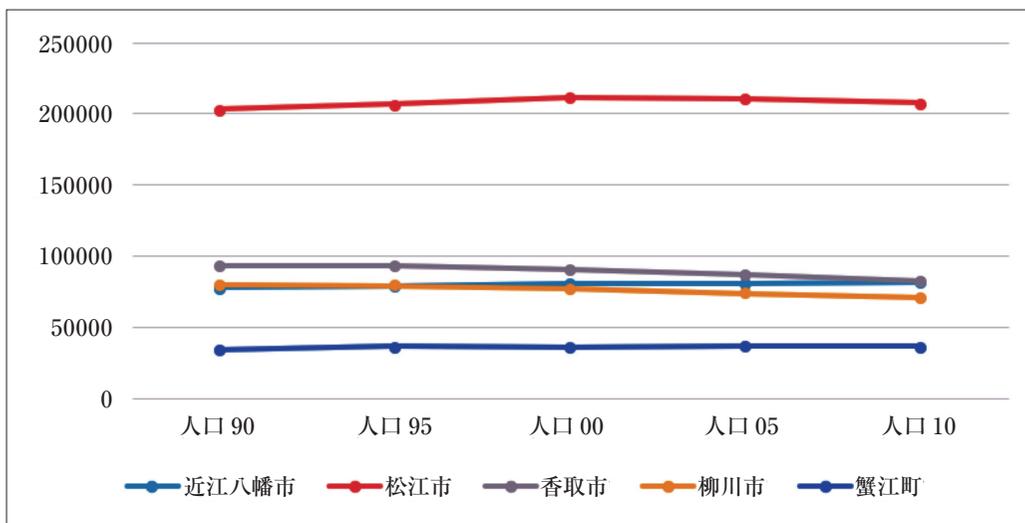
注) 筆者が Map Info によって作成。(表紙も同様)

II 水辺の都市5つの比較

1. 人口比較

図2において、1990年から2010年の4ヶ年の国勢調査による人口データが示されている。これについては、5都市ともに人口の変化はあまり見られない。とりわけ近江八幡市は、2010年3月に安土町と合併している。また近江八幡市、香取市および柳川市の人口は、ほぼ同じ規模である。

図2 人口の推移

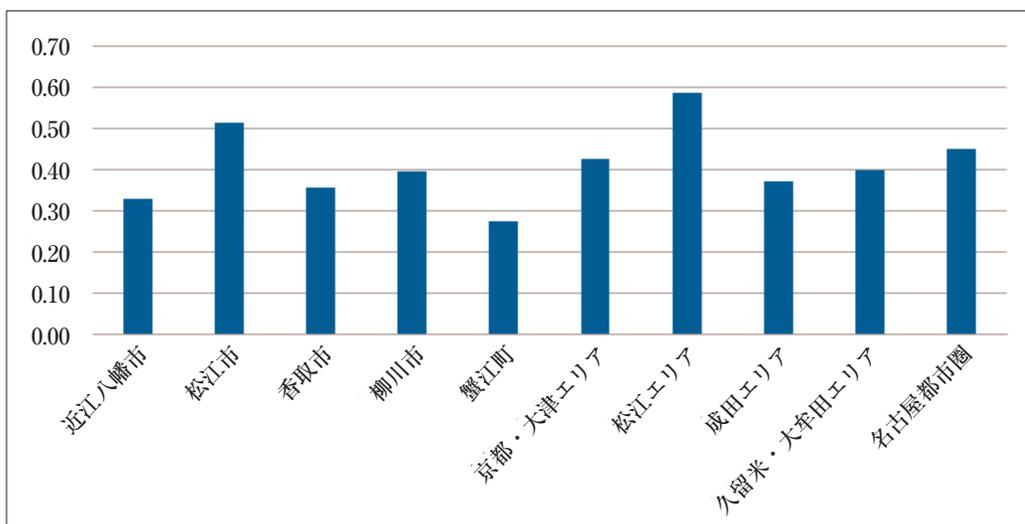


注) 『2014 地域経済総覧』東洋経済、2013年からデータを利用。なお人口の単位は人である。

2. 人口当たり歳出

図3から、松江市と同市を含む松江エリア、蟹江町と同町を含む名古屋都市圏のそれぞれの組み合わせにおいて、人口当たりの歳出に差が見られるが、香取市と成田エリア、柳川市と久留米・大牟田エリアのように都市の規模とその都市が含まれるエリアの規模が比較的小さい組み合わせについては、人口当たりの歳出の差は、ほとんど見られない。

図3 人口当たり歳出

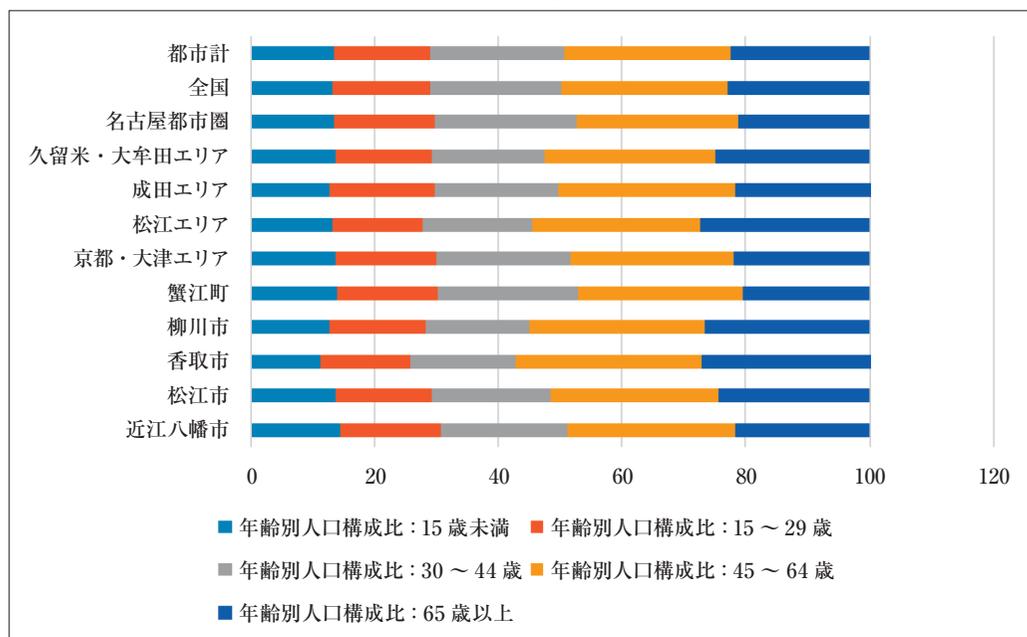


注) 「民力 2013」朝日新聞社からデータを利用、なお単位は歳出(百万円)/人であり、データは2010年度のものである。

3. 年齢構成比

図4から、2010年度の国調によると、全国および都市の年齢構成比を基準とすると、松江エリア、柳川市、香取市および松江市が高齢者の比率が相対的に高い。また、香取市の幼年人口比率が相対的に低く、他の都市はほぼ全国並みである。

図4 年齢構成比



注) ここでのデータは「民力2013」朝日新聞社を利用、また都市計は、市の総計の比率を示している。

4. 産業構造特性

ここでは、5つの都市とそれらの都市を含む5つのエリアにおける産業が、特化している程度を分析するために、特化係数法を用いる。特化係数 S は、

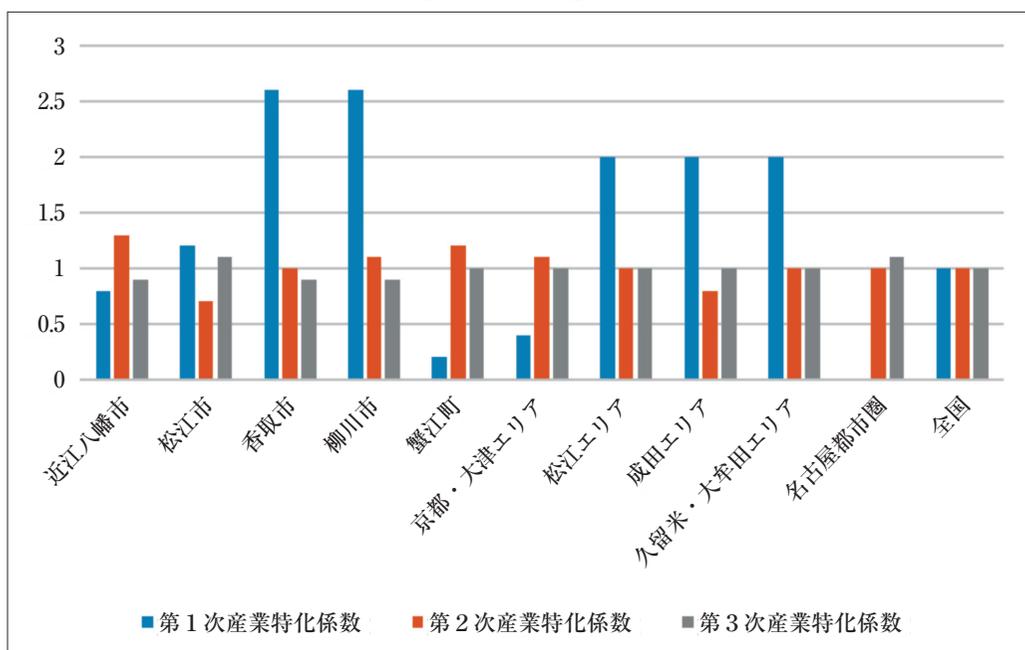
$$S = \frac{R_i / R}{N_i / N}$$

で表される。ただし、 R_i は当該都市の産業 i の就業者数、 R は当該都市の総就業者数、 N_i は全国の産業 i の就業者数、 N は全国の総就業者数をそれぞれ示す。

(1) 3つの産業からの分類

図5から、都市および都市圏・エリアの産業就業者において全国の比率よりも大きい比率を意味する点で、特化係数が1以上のところを見ると、香取市および柳川市の第1次産業の特化係数がとりわけ高く、ついで松江エリア、成田エリアおよび久留米・大牟田エリアの特化係数が高い。したがって、香取市および柳川については各都市を含むエリアも農業に特化していることから、水辺を用いた農業が伝統的に受け継がれたものがあるように見える。一方近江八幡市および蟹江町などは、農業に特化しておらず、どちらかと言えば、僅かながら第2次産業に特化している。

図5 産業別特化係数



注) 「民力2013」朝日新聞社からデータを利用。

(2) 18の産業からの分類

18の産業大分類（総務省統計局）の従業者にもとづいて、5つの都市の特化係数を導くと、つぎの分析結果が得られる。（図6および表1）

i. 産業別に特に高い特化係数（1.5以上）を有する都市

農林漁業では香取市、エネルギー業では松江市⁴、運輸・郵便業では蟹江町、金融・保険業では松江市、宿泊・飲食サービス業では蟹江町、医療・福祉では柳川市、複合サービス⁵では柳川市および香取市、公務では松江市である。

4 特化係数における全国比率との関係から、ここでは農林漁業に関して松江市の特化係数が1以上であることに注意を要する。

5 この大分類には、信用事業、保険事業又は共済事業と併せて複数の大分類にわたる各種のサービスを提供する事業所であって、法的に事業の種類や範囲が決められている郵便局、農業協同組合等が含まれる。

ii. 水辺のまちの産業の共通性（特化係数が1以上）

・ 3つの都市に共通する産業

- ① 農林漁業：香取市、松江市、柳川市
- ② 製造業：蟹江町、近江八幡市、柳川市
- ③ エネルギー業：松江市、蟹江町、香取市
- ④ 宿泊・飲食サービス業：蟹江町、近江八幡市、松江市

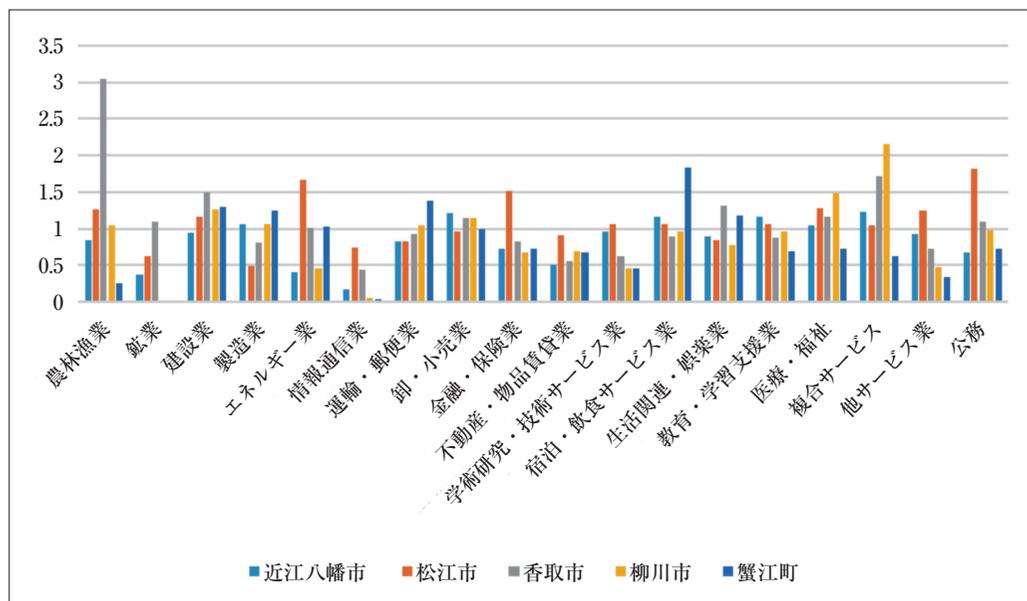
上記の3つの都市に共通する産業において、すべての産業に関わっている都市は見当たらない。ただし、農林漁業が特化している都市は、比較的高齢化している都市であり、製造、エネルギーおよび宿泊・飲食業が特化している都市は県庁所在都市か京阪神大都市圏および中京大都市圏に含まれている。

・ 4つの都市に共通する産業

- ① 建設業：香取市、蟹江町、柳川市、松江市
- ② 卸・小売業：近江八幡市、香取市、柳川市、蟹江町
- ③ 医療・福祉：柳川市、松江市、香取市、近江八幡市
- ④ 複合サービス：柳川市、香取市、近江八幡市、松江市

上記の4つの都市に共通する産業において、すべての産業に関わっている都市は、柳川市および香取市である。これらの都市については、水辺において水を利用する工場の建設や農作物、それを利用する製造業、そこで生産されたものを売る小売業、高齢化に対応した福祉施設、農業を支える協同組合などを考慮すると、自ずと4つの産業が特化しているものと考察される。

図6 従業者特化係数



注) 『2014 地域経済総覧』 東洋経済、2013年からデータを利用。

表1 従業者ベースの都市・エリア別産業別特化係数

都市・エリア	農林漁業	鉱業	建設業	製造業
近江八幡市	0.85	0.37	0.94	1.06
松江市	1.26	0.63	1.17	0.49
香取市	3.05	1.1	1.5	0.81
柳川市	1.05	0	1.27	1.06
蟹江町	0.25	0	1.29	1.25
全国	1	1	1	1
都市・エリア	エネルギー業	情報通信業	運輸・郵便業	卸・小売業
近江八幡市	0.41	0.17	0.83	1.21
松江市	1.66	0.74	0.82	0.97
香取市	1.01	0.44	0.93	1.14
柳川市	0.45	0.06	1.04	1.14
蟹江町	1.03	0.04	1.39	1
全国	1	1	1	1
都市・エリア	金融・保険業	不動産・物品賃貸業	学術研究・技術サービス業	宿泊・飲食サービス業
近江八幡市	0.73	0.5	0.96	1.17
松江市	1.52	0.91	1.07	1.07
香取市	0.82	0.56	0.62	0.89
柳川市	0.68	0.69	0.45	0.96
蟹江町	0.73	0.67	0.46	1.83
全国	1	1	1	1
都市・エリア	生活関連・娯楽業	教育・学習支援業	医療・福祉	複合サービス
近江八幡市	0.89	1.16	1.04	1.23
松江市	0.85	1.06	1.28	1.04
香取市	1.31	0.88	1.16	1.72
柳川市	0.78	0.97	1.48	2.16
蟹江町	1.18	0.7	0.73	0.63
全国	1	1	1	1
都市・エリア	他サービス業	公務		
近江八幡市	0.93	0.67		
松江市	1.25	1.82		
香取市	0.72	1.1		
柳川市	0.47	0.98		
蟹江町	0.34	0.73		
全国	1	1		

注) 『2014 地域経済総覧』東洋経済、2013年からデータを利用、また網掛け部分の数値は、1以上を示す。

5. 5都市5エリア地域に関する特性

ここでは、主成分分析手法を用いるに当たり、10のサンプルに対して変数が10以下に限られてしまうこと、および平均値との比較から全国データを加えた。また変数は、表2から年齢別人口比、従業者ベースの産業構成比、人口密度、昼間人口比の観点から8つの変数を採用した。主成分分析の結果については、つぎの通りである。表2の累積負荷量から第1主成分と第2主成分で全体の74.6%が説明されている。

〈第1主成分〉

この主成分は、表2から主成分負荷量が47.6%から全体の約半分が説明されている。主成分負荷量のプラスに強く作用している変数は、15～64歳の人口比(生産年齢人口比)であり、プラスに比較的強く作用している変数は、人口密度、第3次産業比および15歳未満の人口比(幼年人口比)である。これらプラスの変数に強く関わっている都市およびエリアは、表3から名古屋都市圏、蟹江町および京都・大津都市圏である。一方、表2から主成分負荷量のマイナス

に強く作用している変数は、第1次産業比および65歳人口比（高齢人口比）である。これらマイナスの変数に強く関わっている都市およびエリアは、表3から香取市、柳川市および松江エリアである。これらのことから、この主成分は「都市化—非都市化」を意味している⁶。

〈第2主成分〉

この主成分は、表2から主成分負荷量が27%から全体の約3割が説明されている。主成分負荷量のプラスに比較的強く作用している変数は、第3次産業比および昼間人口比であり、これらプラスの変数に強く関わっている都市およびエリアは、表3から松江市および成田エリアである。なお、名古屋都市圏は主成分得点の高い第1主成分に含まれる。一方、主成分負荷量のマイナスに強く作用している変数は、表2から第2次産業比のみである。このマイナスの変数に強く関わっている都市は、表3から近江八幡市である。なお、蟹江町は主成分得点の高い第1主成分に含まれる。

表2 主成分負荷量

変数	第1主成分	第2主成分
15歳未満	0.607	-0.343
15～64歳	0.837	-0.086
65歳以上	-0.925	0.192
昼間人口比	0.387	0.735
人口密度	0.680	0.049
第1次産業比	-0.936	0.173
第2次産業比	0.158	-0.936
第3次産業比	0.608	0.739
負荷量	47.6%	27%
累積負荷量	47.6%	74.6%

表3 主成分得点

都市・エリア	第1主成分	第2主成分
近江八幡市	0.646	-2.796
松江市	0.242	2.137
香取市	-2.989	0.155
柳川市	-2.522	-0.859
蟹江町	2.067	-1.973
京都・大津エリア	1.343	-0.256
松江エリア	-1.997	0.498
成田エリア	0.406	1.577
久留米・大牟田エリア	-0.954	0.029
名古屋都市圏	3.314	1.301
全国	0.445	0.186

注) ここでのデータについては、「民力2013」朝日新聞社を利用した。また網掛け部分の数値は、絶対値1以上を示す。

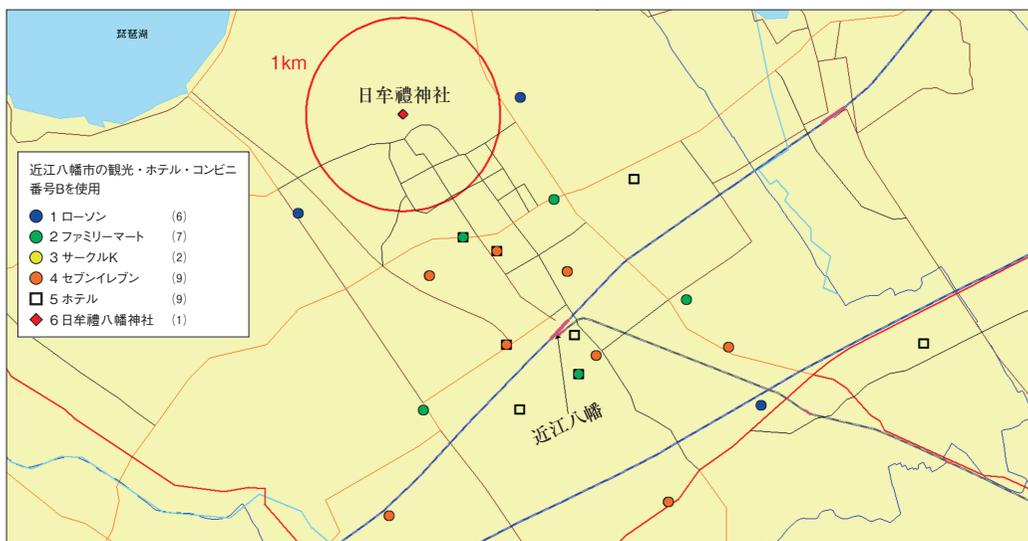
Ⅲ 近江八幡市の観光地特性

図7は、近江八幡市の駅（写真1および写真2を参照）および主たる観光資源を覆う地図が示されており、赤線の丸は観光資源が集中している日牟禮神社を中心に1kmの円を示している。（これらの観光資源については写真3から写真12を参照）また道路地図については、一般県道（黒線）および主要地方道（オレンジ色線）のみである。さらにコンビニの店舗別の立地⁷については、セブンイレブンは駅を中心に広範囲に立地しており、ローソンは数が少ないものの観光資源の周辺に立地している傾向にある。ファミリーマートは観光資源または駅周辺に立地している傾向にある。

6 都市経済学の分野において都市化については、一般に(1)人口密度、企業密度が高いこと、(2)非農業的土地利用の高さ、(3)社会的相互依存性の強さ、などが同時に満たされることが示されている。

7 これについては、日本ソフト販売の『電話帳図書館 Ver.12』（2013年度）を用いている。

図7 近江八幡市における観光資源、ホテル、コンビニ別の立地



注) 筆者が Map Info にて作成。



写真1 近江八幡駅南口



写真2 南口駅周辺



写真3 日牟禮八幡宮



写真4 日牟禮八幡宮正門



写真5 水郷めぐり



写真6 水郷めぐり（時代劇に使われる橋）



写真7 旧街道筋



写真8 和菓子屋（たねや本店）



写真9 旧西川家邸宅



写真10 八幡堀（時代劇のロケに使われる）



写真11 ヴォーリス像



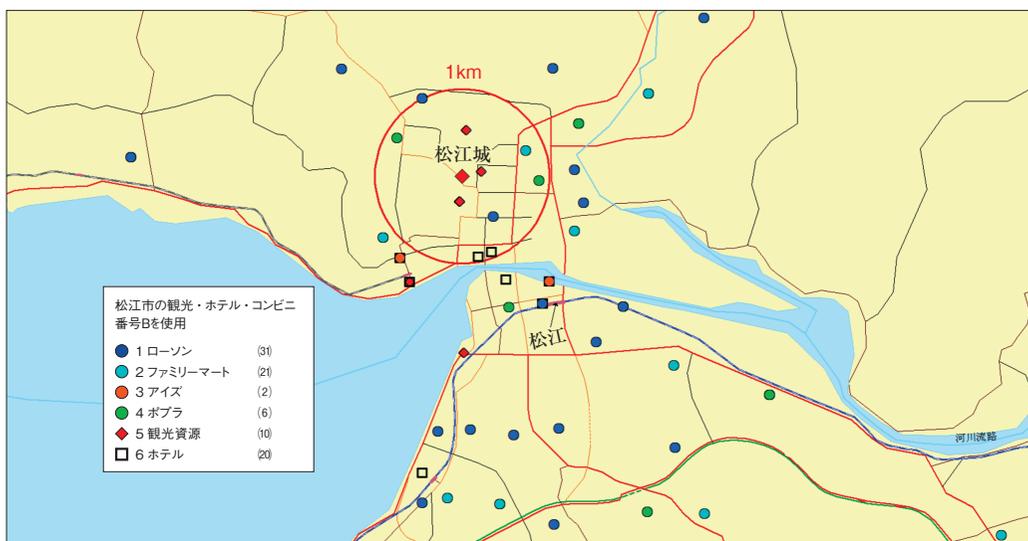
写真12 メンソレータムの本社

IV 松江市の観光地特性

図8は、松江市の駅（写真13、写真24、写真32、写真33、写真34を参照）および主たる観光資源を覆う地図が示されており、赤線の丸は観光資源が集中している松江城（写真16、写真17、写真18）を中心に1kmの円を示している。松江城を除く観光資源については、写真19から写真23を参照せよ。また1km圏外で松江駅との間には昔ながらの商店街や神社仏閣などが見られる。（写真25、写真26、写真31、写真32を参照）

ローソンは数も多く、広域的に立地している傾向が見られる。ポプラ⁸は観光資源の周辺に見られる。また地元資本のアイズは、数が少ないものの松江駅やホテルの近くに立地している。

図8 松江市における観光資源、ホテル、コンビニ別の立地



注) 筆者が Map Info にて作成。

8 このコンビニエンスストアは、2013年11月現在において、本社は広島県にあり、全国店舗数は694あり、最大の広島県で109、鳥根県では66ある。(WWW.poplar-cvs.co.jpを参照)



写真 13 駅南口



写真 14 遊覧船発着所



写真 15 堀川遊覧船



写真 16 松江城のお堀



写真 17 松江城



写真 18 松江城の庭園



写真 19 小泉八雲の自宅正門



写真 20 小泉八雲の家



写真 21 小泉八雲の肖像画



写真 22 武家屋敷



写真 23 松江レイクライン



写真 24 松江駅北口



写真 25 新しい商店街



写真 26 宍道湖と構想ビル



写真 27 旧松江日本銀行支店

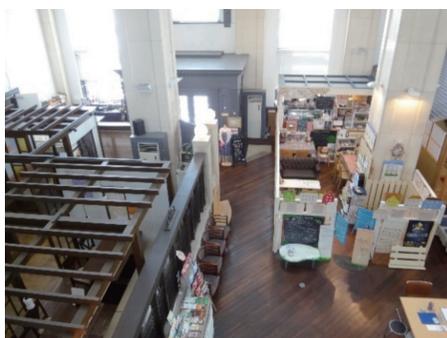


写真 28 カラコロ工房



写真 29 カラコロ工房の空間



写真 30 カラコロ工房（旧松江日銀支店）



写真 31 NPO 法人事務所



写真 32 神魂神社



写真 33 駅前通り



写真 34 松江駅のレイクライン乗り場

V おわりに

水辺を利用した農業は、観光との関連性を持ちながら農業生産を維持している都市とそうでない都市、水運観光のみに特化した都市など現在では、多様な様相を呈している。また都市の特性としては、相対的ではあるが、都市化している地域と非都市化地域に分けられた。

今回の視察を通じて、近江八幡市は京都・大阪などの通勤圏に入るためにショッピングセンターなどがある駅前地区と観光資源が集積している地区とが明確に分けられている。前者は生産年齢人口が比較的多い地区であり、後者は高齢者が比較的多い地区であるように見える。一

方松江市は、地方の県庁所在都市であり、松江城を中心に観光資源や企業が混在しており、縁結びの神社も多く、若い観光旅行者も比較的多いように感じられた。

日経グローバルによると⁹、県のレベルにおいて、滋賀県では、びわ湖一周を旅のブランドとして、県内の観光施設・資源を周回できる体験型観光プログラムを創造している。一方島根県は神々、ご縁をキーワードに情報を発信し、「神楽」や「縁結び」のイメージを活用した商品づくりに支援をしている。また、記紀神話とゆかりの深い三重県、奈良県との連携を深めている。

最後に、本論は2012年11月4日に今治アーバンホテルで開催された研究会（愛知大学経営総合科学研究所の企業調査「池内タオル株式会社」）において発表した内容を、さらに発展させたものである。この場を借りて、企業調査に参加された研究所員の方々に謝意を表する次第である。

参考文献

- 神頭広好・角本伸晃・麻生憲一著（2009）『観光とまちづくり—岩国市、尾道市を中心にして—』
愛知大学経営総合科学研究所叢書 34、愛知大学経営総合科学研究所
- 神頭広好・駒木伸比古・吉本理沙・麻生憲一・角本伸晃・張 慧娟・長橋 透・野呂純一著（2013）
『日本における水辺のまちづくり—蟹江町、柳川市、香取市を対象にして—』愛知大学経営
総合科学研究所叢書 42、愛知大学経営総合科学研究所

9 日経グローバル、No.222、2013.6.17 における p.22 を参照

